

報告③

（特集）各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 吉賀高校の高校魅力化（1）

第21代校長渡部敏郎先生（2018年度～2020年度）の語り

——（地元の）吉賀町にとって吉賀高校はどうあるべきか

常に考えながらやっています。——

青山学院大学 樋田大二郎

島根県立吉賀高等学校第二二代校長の渡部俊郎先生（二〇一八年度・二〇二〇年度）に対するインタビューは二〇二〇年二月二三日、アンブレプレナーシップ教育の発表会の終了後に行われた。

従来の発表会は、選ばれたチームが前に出て行う形式であったが、渡部校長の代からはすべてのチームが中・高校・町民を町の体育館に招待してポスターセッションの形式で行うようになった。

渡部校長の前任校は島根県立出雲高等学校であり、出雲高校は文科省のSSHとSGHを同時に行う高校で、渡部校長は教員集団をとりまとめ運営を担ってきた。

渡部校長が赴任した二〇一八年度は、吉賀高校の高校魅力化・活性化事業が二〇一一年度からスタートしてから七年が経過し（第三期の二

年目）、二〇二二年度に聞き書きが始まって六年が経ち、聞き書きから発展したアンブレプレナーシップが二〇一三年度に始まってから五年が経ち、島根県の「地域系部活動設置促進事業（島根の未来実現事業）」（二〇一四年度・二〇一五年度）の助成を受けて吉高地域クラブが始まって四年が過ぎていた。同事業は名称を変えて二〇二〇年度まで実施された。ハードの面でも町の支援で寮（名称は交流センター）と公設学習塾（名称は吉賀塾ネクスト）がスタートして一年が経っていた。そして、後述するように渡部校長の赴任の年から、高校魅力化の主幹教員が配置されるようになった。このように主要な取り組みだけ見ても、毎年のように新しい取り組みが開始されていた。

◇ 渡部校長は、赴任時の吉賀高校の状況について次のように語った。

私の仕事とすると、そのセンターとか、よしか塾とか、吉賀町や町の皆さんとの関係を円滑に軌道に乗せていくような役割を果たすことが求められていた状況でした。……本校の高校魅力化の柱とすると、総合的な探究の時間を利用したアントレプレナーシップ教育と、全校生徒が所属する地域クラブ活動です。これ地域に出向いて行って、地域と一体となって学校生活を創っているというようなのが、生徒の状況でした。(インタビューより引用。以降同じ)

◇ 前述のように渡部校長の赴任に合わせるかのように、島根県では高校魅力化の主幹教諭の制度が始まったが、渡部校長は次のように、主幹教諭を位置つけた。

主幹教諭の授業時数を週四時間に抑えて捻出した時間を、生徒募集やアントレプレナーシップの総括者として、まさに魅力化事業の推進責任者として動いてもらっています。その成果は絶大で、県外からの志願者への手厚い対応が可能となり、またアントレプレナーシップ教育は更なる深まりを見せています。ここ数年で生徒にとってより魅力的な学校になっていると思います。

◇ 渡部校長は沿岸部の地方中堅都市に位置し有名大学への進学実績を誇る出雲高校から中山間地域の吉賀高校に異動して、地元「吉賀町」として吉賀高校はどうあるべきかは常に考えながやっています」と語る。

魅力化事業が進んでいって、県の主導で町と一体となった高校魅力化が進むようになり、町の支援も手厚く定着しています。だから県立高校だけれど、実際には町からの手厚い支援をいただいているので、これはもう町の発展を無視しては県立高校だと言って、高校が町とかかわらないというのは、今の島根県はそういう時代じゃありません。吉賀町にとって吉賀高校はどうあるべきかは常に考えながやっています。

◇ 渡部校長はアントレプレナーシップの活動について、吉賀町にとつての吉賀高校を考える中では、生徒が広い視野をもつこと、自分の適性や能力を育てたり見極めたりすることが大切な課題になるが、「このアントレの活動つてすごく役に立っています。」と高く評価している。

小規模校なので、視野が狭くなるので。できるだけ広い視野をもつて欲しいなと思っています。町内の子はずっと子どもの頃からみんな知り合いで、かなり閉塞的な人間関係で上がってくるわけです。良いところは良いところですがごくあるんですけれども、外に向かって視野を広げにくいという一面があります。……いろんな可能性、いろんな人たちと出会って、視野を広げて欲しいです。高い視点と言うか。自分の適正や能力も見極めて欲しいです。そのためには、結構、教室の勉強はもちろんなんですけど、このアントレの活動つてすごく役に立っています。生徒たちの言葉のなかに、「役割分担ができるようになった」とか。「自分の強みはこういうことを広めること」、「しゃべることは自分の得意なこと」だとか、上手に役割分担をグループのなかでしてい



るのです。だから、自分の強みを人と一緒にやる中で見出すことができている。だから、自分の強みを人と一緒にやる中で見出すことができている。」

渡部校長は吉高地域クラブの活動についても、その成果を次のように高く評価している。

課外活動として地域クラブという組織があります。本校の校内的な魅力化は、アントレプレナーシップ教育と地域クラブです。地域クラブとは非常に便利な言葉で、明後日に開催される吉賀町サクラマスプロジェクトフォーラムを回していくファシリテーターもうちの生徒なのです。これも地域クラブの一環として参加しています。町教委からの依頼に応える形で有志の生徒たちが出ていっています。そういうのが年間何回かあるんです。特に町教委との連携が密になってきたので、今年はそういう機会が増えました。

◇ 地域学校協働については、プロジェクト会議を評価すると共に、地域のリタイアした人たちの支援が助かっているということであった。

コンソーシアムは総務課高校支援室が中心となって動かしているのですが、コンソーシアムの委員会が機能している形になっています。

ポイントはそのコンソーシアムの下部組織として実行的な小会議、いわゆるプロジェクト会議が機能していて、コンソーシアム自体も円滑に進行しています。」「(高校魅力化を運営していくう

えでの人的支援の状況は) 人生のベテランと言いますか、退職された一般の方、そういうベテランの方たちが入ってくれています。だから地域の伝統行事であるとか、そういうものは結構仕事をリタイアされた方は豊富におられて、協力してもらっています。あと、いわゆるＩターンで入ってこられたような方には今回も入ってもらっています。……自営をしておられるような程度ゆとりをもった勤務形態の方にお手伝いしてもらっています。あと、働き世代で言うと、圧倒的に連携しているのは役場関係です。役場とか商工会とか、介護施設の方であるとか。町の課題見つけるという点では大変ありがたいです。

◇ 募集対策に関連しては、意欲の高い子からの出願を期待している。

まずは推薦に出してきてほしいです。学力よりも、意欲です。意欲の高い子が来てくれたほうがいいのです。逆に推薦で思いをいろいろ語ってくれて、本校に対して本当に来たいと思う子に入学して欲しいです。……県外から新しい価値観が入ってくるので。県外じゃなくても、益田市でもいいですし、浜田市からでも。吉賀町はあまりにも中山間地として孤立しているので、やっぱり他地域からの違った生育環境で育った子たちが入ってきたことは本当に良かった。いいですね。

◇ 渡部校長は自らの体験から、高校魅力化の取り組みについて、以下のように貴重な取り組みであると考えている。

生徒募集において、都会地で苦しんでいる子や、その子たちの家族に新しい道を示すことができるのは、新たな経験でした。都会から来てくれた生徒やご家族の笑顔を見るなんていうことは今までなかったのです。すごく新鮮な経験です。島根留学や地域みらい留学は、いろいろな人を生かしている取り組みだと思います。……新しい場所で何かを変えたいと思っている子たちがたくさん来てくれて、すごく大事な役割を担ってくれています。これは島根県にとっても吉賀町にとっても、貴重な取り組みだなと思います。

吉賀高校に来て良かったと思っています。魅力化事業は魅力化校にいない人は知らないですから。町の人たちが一生懸命になつて支えてくれていることをすごく実感できて、大変貴重な経験をさせてもらっています。あと、財政的な支援には本当に感謝しています。県や町からの財政的支援によっているんなことができます。これも事実です。その点では校長として島根県の魅力化事業は本当にありがたいと思います。

◇ ◇

1 二〇一八年度赴任時の高校魅力化の状況

——ありがとうございます。先生が赴任した頃から、今日まで、吉賀高校の高校魅力化のとりくみがどんな感じで進んだかということをお伺いしたいと思います。

まず、先生が赴任した頃の吉賀高校の概要と当時の魅力化の概要、そして高校魅力化をめぐる地域の様子はどうだったでしょうか。

渡部：私が赴任した半年前に、町長さんが新しくなられました。今の岩本町長さんの選挙公約として「吉賀高校を支援する」ということが挙げられていました。そのこともあり吉賀町は全面的に吉賀高校を手厚く支援する方向で動いている時でした。そして、今のサクラマス交流センターという寮が完成して一年が経過したところでした。

また、よしか塾ネクストという塾も設立されてちょうど一年が終わったところで、ある程度のハード面のサポートができていたところで、私の仕事とすると、そのセンターとか、よしか塾とか、吉賀町や町の皆さんとの関係を円滑に軌道に乗せていくような役割を果たすことが求められていた状況でした。

——当時の高校魅力化をめぐる学校と生徒の状況はいかがだったでしょうか。

渡部：本校の高校魅力化の柱とすると、総合的な探究の時間を利用したアントレプレナーシップ教育と、全校生徒が所属する地域クラブ活動です。これで地域に向向いて行って、地域と一体となって学校生活を創っているというようなのが、生徒の状況でした。

ただ、アントレプレナーシップ教育自体が、外から入ってきたものにとってみると、今ひとつ担当者次第というところがあって、学年全体、学校全体としての組織的な動きに欠けていました。担当者の思いややり方で、学年によって全然できあがってくる内容がまちまちで、あま

り組織的に回っていないのを感じました。

あと、町のお祭り等は定期的に安定して行事もありますので、地域クラブについては、コーディネーターを中心に有志の生徒を募って、積極的に出て行っているような状況は伺うことができました。

——先生が、吉賀高校に赴任されたのが二〇一八年度から。

渡部：二〇一八年度です。

——吉賀高校は二〇一一年度から高校魅力化をされていますが、先ほど、学校全体としての組織にはあまりなっていないかったということなのですけども、具体的に状況はどんな感じだったでしょうか。

渡部：過去を紐解くと、一年生で「聞き書き」、二年生で「吉賀町を考える」という取り組みをしていた時期がありました。その当時は実はかなりしつかりとした内容で、それぞれの班が同じような様式でまとめているんですね。けれども、その後、統一感のないまとも方になってきたようで、報告書を見ると具体的な成果物として一貫したものがないという感じで、地域とつながっていることはあるのですけれども、「統一してこういう形でとか、年間を通してこんな力をつけさせて、こういうことをやらせよう」という一貫したものになっていない状況でした。

——先生が赴任した頃の魅力化と、地域共同、コンソーシアムであるとか、学校内の体制であるとかは、いかがだったでしょうか。

渡部…コンソーシアムという形ではなくて、吉賀高校後援会というのが存在しています、それを積極的に解体して、二〇一九年の二月にいわゆるコンソーシアムという吉賀高校支援協議会を、町総務課吉賀高校支援室が中心となって、町長さんや県議さんにも出席してもらって立ち上げることができました。

— その他、プロジェクト会と称して毎月一回、吉賀高校の校長、教頭、事務長、主幹教諭と、吉賀町役場総務課高校支援室、吉賀町教育委員会、吉賀町企画課、産業課の代表で定期的に開いています。今年この二月末で一〇〇回目を迎えます。

— 一〇〇回目ですか。

渡部…一〇〇カ月続いています。魅力化事業が始まることからスタートしたようです。

— そうしますと後援会と呼ばれている段階から……。

渡部…後援会とは別の組織として、もつと小回りのきく会です。

— プロジェクト会自体は……。

渡部…非常に小回りのきく会合として機能しています。

— 太田校長先生の時でしょうか。

渡部…だと思えます。一〇〇を一二で割ると、八・三年ですから。ちょうど、被ります。魅力化にとりかかると、もしくは学校を存続させる、多分そのためのプロジェクトという意味を込めて名前がついたみたいですね。

— わかりました。

渡部…この存在が非常に大きいというか、赴任当初「これだな」と思って、この会に皆さんに積極的に出てきてもらうようにしました。特に教育委員会との関係が密になったのは今年に入ってからでしょうか。去年まで城戸さんというお一人だけだったので、今は小学校からの派遣主事である水上さんにも今年から入ってきてもらって、どんどん教育委員会との連携が密になっています。今回の成果発表会も、町のサクラマスプロジェクトフォーラムと抱き合わせた形で実施できましたし、夏に河原でのサバイバル体験という名でカレージを作ったのも、町教委の主催で一日やってもらいました。このプロジェクト会のお陰で町教委との距離がぐっと近づいたと思っています。

2 高校魅力化の校内組織

— 次に移りたいと思います。従来の高校教育の目標と吉賀高校の高校魅力化との調整のようなことは、ご苦労があったと思うんですけど、どんなことがありましたでしょうか。

渡部…本校の教育目標は、中高一貫でもあるので中学校との共通の目標を目指す必要があります。したがって、ふるさを見つめ地域とともに生きる生徒、基礎基本を身につけ課題解決にとりくむ生徒というのが中学校と連携した目指す生徒像です。

それに加えて、吉賀高校の高校魅力化事業には、島根留学に関わる生徒募集があります。基本的に校長、教頭、主幹教諭とコーディネーターが、その役割を担って、一般の先生方が、生徒募集に行かれることはありません。

アントレプレナーシップ教育については、たまたま私が赴任したと同時に主幹教諭というポストができ、教員が加配になったのです。なので、主幹教諭の授業時数を週四時間に抑えて捻出した時間を、生徒募集やアントレプレナーシップの総括者として、まさに魅力化事業の推進責任者として動いてもらっています。その成果は絶大で、県外からの志願者への手厚い対応が可能となり、またアントレプレナーシップ教育は更なる深まりを見せています。ここ数年で生徒にとってより魅力的な学校になっていると思います。

——主幹教諭のこと、確認したいんですけども、一年生の担任、二年生の担任が居ると思うんですけども、それとアントレの担当者は、イコールなのでしょうか。それとも……。

渡部…今は、イコールです。

——一年生も二年生も。そうしますと主幹教諭はどういう立場になるのでしょうか。

渡部…主幹教諭はアントレプレナーシップの総括です。一年の学年付きになっていまして、探究活動の教職員研修なんかも直接担当してもらっています。あと、地域クラブの総括責任者です。だから、主幹教諭が、高校魅力化を回す係として去年から入ってくれたので、非常に円滑に発展的に動き出しています。

——仮説検証、その検証のしかたも、フィールドワークだったり、アンケートだったりとか……。

渡部…一年生は、まさに型にはまってどの班もあまりやり方に大きな差がないのです。それは一年生でのやり方、教え方で必要なことです。

二年生は二年生で、担当の教諭が毎回計画一覧表を作って全先生方に示して進めています。だから表面的には生徒たちが主体的に活動しているように見えますが、実は教員のしかけの結果だと私は思っています。

——それでは次に、校長先生自身のこれまでの教育経験というのが、吉賀高校での魅力化の取り組みに、どのように役に立ったか、あるいは戸惑ったかというようなことをお話ください。

渡部…私は理科担当なので、こういう探究型の活動というのは最初採用された時から自然科学部の指導等で関わっていました。また理数科を設置している学校での勤務経験が長く課題研究の指導には長らく関わっていました。

その他教諭としての最後となる業務として大規模校でのSSHの立ち上げと申請担当をしました。そのプログラムは全校生徒の探究活動であり、各学年一学年で五〇数グループができるんです。それをとにかく全教員で回すのです。だから、先生方の不満なところか不安なところとかは、一応わかっているつもりです。

うちの魅力化とか、アントレを進める時でもやり方さえ間違わなければ絶対回るだろうと思っていました。だから、たまたま今年はいい回し方をするそれぞれの教員がメイン担当者でついでくれたので、一気にうまくいっていると思っています。

3 視野を広く持たせたい

——続いて、高校生についてお伺いしたいのですけども、理念とか目標のレベルで、吉賀高校が目指す高校生像、理念と具体的なこんな資質能力、こんな進路など、どんな生徒さんを育てたいというふうにお考えですか。

渡部：吉賀町はサクラマスプロジェクトと名付けて、将来的に吉賀町に関わってくれる人材の育成ということを謳っています。私も基本的に中高一貫もありまして、吉賀町を見つめ、吉賀町とともに生きる生徒、またはなんらかの形で定住人口や関係人口になる吉賀町と関わりをもつ生徒を育てなければいけないと思います。そのための必要な資質や基礎学力を身に着けさせなければいけないとも強く感じています。

——そのへん、今だと、そういう言葉もそんなに不思議じゃないかも



しれませんけど、もともと県立高校ですよ。県民を育てる高校という部分もあったと思うんですけども、そんななかで吉賀町、あるいは地域に根付いた生き方をする生徒さんを育てるといふふうには、ちょっとした転換だと思っただけですけれども、そんなことを経験されていかなかったでしょう。

渡部：私もかつて（中山間地域の）矢上高校に勤務していましたが、その時は、町とは全然関わりがないのです。平成の初めの頃はそういう時代でした。けれども魅力化事業が進んでいって、県の主導で町と一体となった高校魅力化が進むようになり、町の支援も手厚く定着しています。だから県立高校なのだけれど、実際には町からの手厚い支援をいただいているので、これはもう町の発展を無視しては県立高校だと言って、高校が町とかかわらないというのは、今の島根県はそういう時代じゃありません。吉賀町にとって吉賀高校はどうあるべきかは常に考えながらやっています。

——もうちょっと踏み込んで、具体的にこんな資質とか、こんな能力とか、こんな進路とかをとらわけ意識されているというようなことは何かありますでしょうか。

渡部：小規模校なので、視野が狭くなるので、できるだけ広い視野をもつて欲しいなと思っています。町内の子はずっと子どもの頃からみんな知り合いで、かなり閉塞的な人間関係で上がってくるわけです。良いところは良いところですがごくあるんですけれども、外に向かって視野を広げにくいという一面があります。

内輪の中ではすごく明るく、ざつくばらんなんですけれども、あんまりいろんな人と同世代でも出会わないので、悪い意味では人と比較ができていく、客観的に自分の良さとか自分の個性とか、自分の強いところを見出しにくいんじゃないかと思っています。そのためには、まず地域の大人たちともたくさん出会わせて、少しでも視野を広げてほしい。校内だけだったら、対大人というのは教員だけです。やはり成長に限りがあります。

だけど、世の中の一般の大人の人たちとこういう多感な年代にまじめな話をすると、一気に成長します。だから生徒たちを、外の大人と出会わせることによって、生徒を大人にしたいという気持ちはすごくあって、できるだけ視野を広く持たせたいと思っています。そういう点では、県外からの生徒の存在も非常にいい効果をもたらしています。

自分の能力が、客観的にわからないから、あんまり高みを目指そうとしないのです。例えば、今、大学の一般入試に挑戦する生徒は一人だけなんです。その生徒は圧倒的に学校の中ではできるわけです。けどずっと数学教師志望できていたのに、本当に進路を考えた時に、実は「僕、理科です」ということになって、自分は校内で理科もダントトップ、数学もダントトップ、自分には何が向いているのかなど、（誰かと）話すことも少ない。数学ができる人にもいろんなレベルがあるんじゃないですか。理科ができると言ったって、どういう理科ができるのかも。そういう、学力や適性という点で、生徒同士であまり比較ができない。そういう切磋琢磨が少ないところ、小規模校の弱みかなと思います。

だからできるだけ外の人たちとつながってほしいと思っています。視野を広げる機会をさらに創ることがうちの課題と言えるでしょうか。

——すでに課題も出てきていますけど、その他、課題はどのようなものがありますでしょうか。

渡部…いろんな可能性、いろんな人たちと出会って、視野を広げて欲しいです。高い視点と言うか。自分の適正や能力も見極めて欲しいです。そのためには、結構、教室の勉強はもちろんなんですけど、このアントレの活動ってすごく役に立っています。生徒たちの言葉のなかに、「役割分担ができるようになった」とか。「自分の強みはこういうことを広めること」、「しゃべることは自分の得意なこと」だとか、上手に役割分担をグループのなかでしているのです。だから、自分の強みを人と一緒にやる中で見出すことができます。

——役割分担ができるようになるという話、ほかでも聞くんですけど、具体的にどんな様子なんでしょうか。

渡部…例えば、パワーポイントを作るのが得意な子であったり、構成を考えるのが得意な子だったり、ポスターを作るのが得意な子であったりとか、それが多分自分のなかでわかるところなんです。だからそれを上手に子どもたちのなかで役割分担していると思います。

4 望ましい高校生を育てる取り組み

——カリキュラムや実際の取り組みについてもお伺いしたいのですが、子ども、望ましい高校生像をどのような取り組みのなかでどのように今

育てられていますでしょうか。

渡部…地域社会に開かれたということで、総合的な探究の時間をベースにして、そこにそれぞれのグループにコーディネーターが、地域の方をつないで、吉賀町の課題を発見したり、その解決に向かったりする。基本的にはその総合的な探究の時間を入り口として個別の学びが深まるようにと考えています。カリキュラム・マネージメントの体制としてたら主幹教諭がその中心の役を担ってもっています。

——主幹教諭制度というのはそうしますと、かなり……。

渡部…これがなかったらすごく大変です。今の中山間地域の八校はみんなついてますから。だから、そういう点では非常に上手く回っています。

あと課外活動として地域クラブという組織があります。本校の校内的な魅力化は、アントレプレナーシップ教育と地域クラブです。地域クラブとは非常に便利な言葉で、明後日に開催される吉賀町スクラマプロジェクトフォーラムを回していくファシリテーターもうちの生徒なのです。これも地域クラブの一環として参加しています。町教委からの依頼に応える形で有志の生徒たちが出ていっています。そういうのが年間何回かあるんです。特に町教委との連携が密になってきたので、今年はそういう機会が増えました。

——教育委員会が、今年あたりになってから、いろいろ参加してくれるようになったいきさつというのは？

渡部…教育委員会の中で小学校からの派遣主事が今年からプロジェクト会に出席されるようになって、ものごとがすごく早く進み出しました。その方が絡んでくれたお陰で、かなり円滑に進んでいます。特に一年生の県外生はやる気が旺盛で、その子たちが今乗っかって、「地域の人たちが作った」始まりの会」（聞き手注…高校魅力化を支援する地域住民の会）にも進んで参加してくれています。

—私もつねづね思うんですけども、人の要素って大きいですよ。

渡部…とても大きいですね、高校規模の小さいところでは。

5 評価の方法と基準

—評価についてお伺いしたいのですけども、高校が目指している生徒の学びをどのような方法や基準で評価するのか。また従来の方法や評価基準との異同、限界など。

渡部…評価基準とかいうのは、今はないです。

ポータルフォリオはやっています。ポータルフォリオの担任による評価とか、自己評価を四段階的に行って、それを担任が集約をしています。次年度からは身につけたい力のルーブリックによる自己評価を行う予定です。

—それでは先生の見たとところで、吉賀高校や吉賀高校生はどのよう



に変わったでしょうか。どのような観点から見られているかというところが、興味があるのですけども。

渡部：アントレに対しての自信ができたのじゃないでしょうか。自分たちのやっていること。内容についても自信があり、やっていることの意義を自分たちが見出し、アントレ活動についての学ぶ意欲が非常に高まったと思います。

一年生も二年生も年間計画を生徒にきちっと示しているのです。この時までこれをしようと。それが、結果的に生徒の自信になります。

これがあるから楽しいと言っている生徒も多いです。そういう子たちの生きる力になると本当にいいなと思います。

6 地域学校協働の体制

——地域との協働のところにいきたいのですが、コンソーシアムの体制と組織と実際の運営について。コンソーシアムの機能をより果たしているのは、先ほどのプロジェクト会でしょうか。

渡部：そうです。プロジェクト会は小回りがきいていいです。

コンソーシアムでは委員会を作って、今既存の町と一緒に取組んでいる学校行事をその委員会に落とし込んで、年間計画を作っています。コンソーシアムは総務課高校支援室が中心となって動かし、コンソーシアムの委員会が動いている形になっています。

ポイントはそのコンソーシアムの下部組織として実行的な小会議、いわゆるプロジェクト会議が機能していて、コンソーシアム自体も円滑に進行しています。

——プロジェクト会で、校長先生の役割というのはどんな役割になるのでしょうか。

渡部：プロジェクト会のトップは、以前は町の教育長さんだったので、今は総務課の課長さんがトップです。学校側代表は校長です。

——大学関係者や専門家との関係。こちらは特にSGHとかやっているわけではないので、運営委員会は存在してないですか。

渡部：運営委員会は存在しません。

——先ほどのコンソーシアムにも……。

渡部：大学関係者等の外部関係者はおられません。

——専門家も入っていないということでしょうか。

渡部：これが、本校コンソーシアムの弱いところだと思っています。本校は県教委も認める高校と地域との連携がすでにできあがって上手くしている、すごくいい例なのですけれど。結局誰もうちの学校には飛びついてくれないわけですね。何故かという、県内の主要都

市部から距離的にかなり遠いことと学年一クラスの高校は他に例がなくモデルになりにくいのだと思います。参考にはなっても真似するよ
うな対象じゃないのです。小さすぎるのですね。

——それでは、この地域の人的支援、高校魅力化を運営していくうえ
での人的支援の状況はどうなっていますでしょうか。

渡部：若い方は少ないですけど、人生のベテランと言いますか、退
職された一般の方、そういうベテランの方たちが入ってくれています。
だから地域の伝統行事であるとか、そういうものは結構仕事をリタイ
アされた方は豊富におられて、協力してもらっています。あと、いわ
ゆるＩターンで入ってこられたような方には今回も入ってもらって
います。

——そういう人材は豊富ですか。

渡部：豊富というわけではないです。日頃サラリーマンとかだとまず
ムリなので。自営をしておられるようなある程度ゆとりをもった勤務
形態の方にお手伝いしてもらっています。あと、働き世代で言うと、
圧倒的に連携しているのは役場関係です。役場とか商工会とか、介護
施設の方であるとか。町の課題見つけるという点では大変ありがたい
です。

——コーディネーター、ここは地域協働学習支援員であって、コデー
ネーターという名前だと思っただけですけども、コーディネーターの役割

と、高校内での位置づけはどのようになっておりますでしょうか。

渡部：いわゆる吉賀町総務課つきですので、基本的には。お二人が、
AさんとBさんって方が、高校に机を置いてもらっています。

Aさんについては、今年はアントレの二年生担当で地域とつないでい
くのがメインの仕事です。あと、支援室としての仕事で、吉賀町から
の支援のバス券の発行や、事務処理も担っていたいただいています。

Bさん（女性）のほうは、サクラマス交流センターで寮の関係の支援、
皆さん男性ばかりなので、女性としての支援をしてもらっています。
この二人でだいたい土日の地域活動、地域クラブの活動にどちらかは
必ず出てもらっています。勤務の関係上なかなか休日先生方にそこ
出てもらうというのが簡単ではないので、教員の代表としては主幹教
諭が主に参加してくれています。

7 苦労したこと

——吉賀高校の高校魅力化を行う苦労工夫、あるいはおもしろさみた
いなことを聞いていきたいんですけど。まず、どのような苦労があり
ましたか。

渡部：苦労という点では、私が校長になった時はハード面が整備され
ていましたので。それをいかに、円滑に回していくか。特に、センター
（聞き手注：サクラマス交流センターⅡ町営寮）ですね。週に一回、会議をもつ
て、私は入ってないんですけど、教頭が学校側のトップで、生徒部長、
養護教諭、センターのハウスマスターの方と総務課と一緒に、週に一回、

これも定期的に情報交換しています。

—— 一般受験で入る子が増えて欲しいということはありますでしょうか。

渡部…うちの場合、定員は一年四〇人しかなくて、そのうち県外生を八名と決めています。まずは推薦に出してきてほしいです。学力よりも、意欲です。意欲の高い子が来てくれたほうがいいのです。逆に推薦で思いをいろいろ語ってくれて、本校に対して本当に来たいと思う子に入学して欲しいです。

県外の子は、今の子どもたちは覚悟をもってやってきました。だからみんなの前で発表するなんて、ここに一人で飛び込んでくることと比べたら、大したことないと思います。

今日発表した子なんか。「ここに来たい」と親に言って来たわけです。ここに来たこと自体に比べたら、みんなの前で発表することなんて多分大したことないのです。

中学校の時は学校に行けなかった子たちもいますが、今、うち不登校いないのです。全員学校にきています。これはすごくうれしいことで、何か学校に足を向けるものが吉賀高校にあるのだなと思っています。

—— 一言でまとめちゃうと、高校が魅力的なわけですね。

渡部…だと思えます。県外から新しい価値観が入ってくるので。県外じゃなくても、益田市でもいいですし、浜田市からでも。吉賀町はあまりにも中山間地として孤立しているので、やっぱり他地域からの違っ

た生育環境で育った子たちが入ってきたことは本当に良かった。いいですね。

8 高校魅力化の面白いこと、興味深いこと

—— 高校魅力化をやっていて、おもしろいとか、興味深いと感じたところはどんなところでしょうか。

渡部…まず生徒募集において、都会地で苦しんでいる子や、その子たちの家族に新しい道を示すことができるのは、新たな経験でした。都会から来てくれた生徒やご家族の笑顔を見るなんていうことは今までなかったのです。すごく新鮮な経験です。島根留学や地域みらい留学は、いろいろな人を生かしている取り組みだと思います。

新しい場所で何かを変えたいと思っている子たちがたくさん来てくれて、すごく大事な役割を担ってくれています。これは島根県にとっても吉賀町にとっても、貴重なとりくみだなと思います。

—— 校長先生で自身が高校魅力化の取り組みから得たものがあるとしたらどんなことでしょうか。

渡部…教員以外で、本気で学校のことを考えている一般の方がこんなにおられるのだと言う、感謝の気持ちというか、驚きもあるし、すごいなと思いました。役員関係の人はもちろんですけども、一般の方からも、応援してもらえと言うか、地域のあたたかさはずっと感じます。これは都市部では、ないですよ。ありえないし。市内だったらいつ

ばい学校ありますよね。その学校だけ応援するわけにもいかないし。行政あげて応援してくれるなんてことは、ありえないです。

9 高校魅力化の課題と展望

——吉賀高校の高校魅力化の今後の課題と展望について。

渡部：今進めている魅力化を、メンバーが変わってもできる組織づくりですよ。メンバーが変わりますので、教員が。とにかく長い人でも五年しかいませんので。短ければ講師の人たちは二年とか三年で、定期的に変わっていきます。

高校魅力化の三本柱では、まず生徒募集については、町の支援室やコーディネーターがおられる以上は、主幹教諭のポストが続けばブレないで進んでいきます。アントレ活動は教科書的なワークシート等の「指導の型」の積み重ねができれば、誰が変わっても動いていくと思います。そしてこれも主幹がとりまよめの役を担って、回していきますので、大丈夫なのです。最後に地域クラブも、コーディネーターというポストが続き主幹教諭もきちんとしていければ、これも回っていきます。小規模校なので教員数は今が上限です。したがって無理をして大きく広げず、メンバーが変わっても、今やっている持続可能な教育システムを維持していくことが、一番の課題、無理のない展望だと思います。

——今のお話を伺うと、三本柱のすべてに主幹教諭……。

渡部：主幹教諭なのですよ。

——なんですね。

渡部：もし主幹がいなくなったら教頭でしょうね。

——主幹教諭とか教頭が、高校魅力化、あるいはこういう中山間地域の小規模校ということがしつかり理解できていければ、比較的安心。

渡部：ですね。もちろん校長が最も理解していることが一番ですが。

——聞いていて、非常におもしろいと思ったのですけども。校長、教頭、主幹がしつかりしてれば、それ以外の教諭も自分の方向とか、自分の仕事量とかを理解できる。しかし、校長、教頭、主幹がしつかりしてなければ、非常に優秀な先生が来たとしても上手くいかないことも考えられる。

渡部：島根県の管理職の方は、皆さん魅力化事業をよく理解しておられますのでご安心ください。要は優秀な先生がどこに優秀な力を使ってくれるかですよ。私は校長として、適材適所でそれぞれの先生方の強みを発揮してもらおうよう心がけています。

10 最後に

——それでは最後になりますが、その他思っていること、感じている



こと考えていること、自由に教えていただければと思います。

渡部：吉賀高校に来て良かったと思っています。魅力化事業は魅力化校にいない人は知らないですから。町の人たちが一生懸命になって支えてくれていることをすごく実感できて、大変貴重な経験をさせてもらっています。

あと、財政的な支援には本当に感謝しています。県や町からの財政的支援によっていろんなことができていることも事実です。その点では校長として島根県の魅力化事業は本当にありがたいと思います。

——これで終わります。お忙しい中、ありがとうございました。